

校内教育相談の気運づくり

見附市立葛巻中学校教諭 小林 栄 一

はじめに

1965年版「生徒指導の手びき」(文部省)のオ7章、教育相談の書きだしには、その意義を「ひとりひとりのこどもの教育上の諸問題について本人またはその親、教師などに、その望ましいあり方について助言・指導をすること」「個人のもつ悩みや困難を解決してやることにより、その生活によく適応させ、人格成長への援助を図ろうとするもの」と規定している。

昭和43年4月、学校長以下11名の現任校に着任した私は、前研究主任から研究経過の引きつぎを次のように伝達された。南蒲のほぼ中央にある農耕生活中心の地域で、昭和29年見附市に合併された17部落構成の上にたてられた中学校である。民情は素朴で誠意に満ち、農地開放以前は地域の南部、北部にそれぞれ大地主がいて、ほとんどの農家が小作農としてそのもとにあった。開放後は独立して自作農となり、広大な耕地には蔬菜栽培がさかんで、近年は果樹栽培にも手を染め、消費地が近いので経済的にはめぐまれた水田耕作地帯である。ところが近郷村との競争意識が強く、「おらが村」意識から対抗の構えが強く、それが教育面にまで及んでいる。教育投資と社会教育には関心が高く、組織的にも内容的にも歴史は深い。

こうした教育的風土の中で、学校内の相談活動の実態を見たとき、確かに教師と生徒とのふれあいの中に定着していく人間関係は師と弟でむすばれ、随所に感激的な「出会い」がおこなわれていた。しかし、冷静に教育的営為から見ると、個々バラバラの出会い関係で継続性がなく、一時的現象に見え、一貫して深まっていくという人間関係がなかったといわれる。これは、教えられるものと教えるものとの一般的な中学校の傾向であろうという話であった。

登校の途中ですれちがう工場勤めの青年男女には、時流を追うかなしい華やかさしかないという。中学から実社会へと進んだ生徒がこうも違った姿となるものか? 「ことばがない」「見せる」「意識する」といった傾向が多い。それと対象して学校内にある生徒の実態は、まったくの素朴さで、言いつけられれば、そのとおりに動き、労働をいとわない。受身の学習が多い。就職者(定時制を含め)約15%, 残り85%が高校進学者(実業校が多い)と、ここ数年の経緯を教えられた。

これらの事情から、行動と心のバランスが環境によってきわだって変わっていく姿に気持ちがひかれた。

素直で温和であるが、集団の中における個の成立は? 積極的な自己開発は? 己れを見つめる精神活動は? と視点をかえてながめると、出てくる答えは「反応がない」「消極的である」「自分が表現できない」「殻にこもる」とくる。出席状況のよくない生徒もいる。異常なあこがれを追う生徒

もいる。この極端なまでの発達段階・意識のずれをどうおさえていくか？

こうした時、新進の現校長が着任（昭和42年春）、葛中経営基本方針が樹立されたと聞く。これに呼応するかのようには地域父兄の声と同窓会の全面的協力（中学校新設20周年記念行事）によって普通教室改築になる教育相談室4つが誕生した。ここで私がバトンを引きついでわけである。

I 教育相談につながる本校教育目標

1 学校教育目標

- (1) 基礎体力をそなえ、進取敢行の活力にも溢れ、進路には自信と希望をもって励む中学生（体）
- (2) 向上心と判断力は高く、進んで為すべき課題にとりくんで自分を鍛えようとする向学心に燃える中学生（知）
- (3) 社会性・道徳性にすぐれ、集団生活のルールを理解して守り、集団への奉仕もできる道徳的実践力のある中学生（徳）

2 重点教育目標

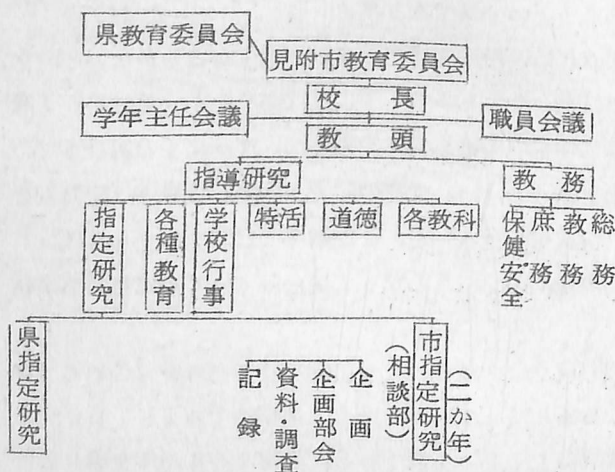
学習生活の中で、すすんで自己表現のできる生徒を育てる

3 学年指導指標

- 1年 中学校における学習の方法を体得し、すすんで課題を解決する生徒
- 2年 伸びている方向と落ちている力を評価し、すすんで実力を高める生徒
- 3年 3ヶ年の学習内容をすすんで仕上げ、進路に自信と希望のもてる生徒

II 教育相談態勢の確立と研究経過

1 研究組織



2. 昭和43年度実践経過（第1年次）

＜研究才1期 4月～8月＞

①前年度実践結果の反省検討

- ・相談室の有効な活用
- ・資料収集のくふう
- ・相談技術の研修
- ・研究推進のための組織

②研究主題設定のために（県教育センター定期研修員として参加）

- ・悩みの実態調査
- ・観察記録の整理
- ・事例研究全体会

- ③個人相談カード作製 ④資料整理棚作製 ⑤県教育センター相談部主事・市教委指導主事を招いて指導会実施 ⑥定期相談開始 ⑦家庭訪問、父母と語る会実施

＜研究才2期 9月～12月＞

- ①教育相談先進校留学研修（東京・江北中、志村才1中） ②研究実践校視察と研究交換（長岡・宮内中） ③長岡市教協生徒指導部と研究交換会 ④中越教育事務所指導主事を招き指導会 ⑤校内研究会（事例研究、ロールプレイングなど） ⑥才2次生徒実態調査 ⑦研究経過整理冊子にまとめる

＜研究才3期 1月～3月＞

- ①各人資料（記録整理一呼び出し、チャンス、自発、グループ相談メモより）
②本年度実践のまとめ
③研究会構想（才1次）案検討会

3 昭和44年度実践経過（第2年次）

この年の人事異動で11名の職員中、6名が転出入という事態となった。加えて県指定「学校体育」の発表会が10月下旬ときまり、相談活動は年度計画に詳細に盛りこむと同時に、月、日の中にも場と時間を設け、各教師の個人研究を推進していく態勢をとった。その主なるものを書き出してみると、定期相談の内容（方向）を学年によって明確に位置づけたこと、相談室利用手続きの簡素化、相談部の研究推進に関する業務の強化、11月中旬に教育相談の発表会を持つ準備、検査・調査・資料のまとめ、紀要骨子づくりとその肉づけのための研修会、随時相談の時間設定、才5相談室づくり、屋外相談室（才6相談室）づくりなど実践されていた。

Ⅲ 本校研究の焦点

1 教師自身の変容

研究1年次のはじめは、研究協議会という性格よりも会議という考え方が先行していて、話の深まりが持てなかった。結論が早く出るか、ある特定の人だけの話に終わるか、感情的な空気に終始するか、とにかく模索と混迷がからみ、共通理解に達して明日の教室で生徒との生活でおこなおうという構えができなかった。人間関係で個性というのはこういうものなのかといへん疑問に思った。まず、教師の自己受容こそ先決ではないだろうかと思え、前述の計画を実践すると同時に会議の発言をそのまま記録し、翌朝机上に配布していく方式をとった。それはまた、計画の実践と研究の集積にもつながると考えたからである。静かなるかかわり合い方でもあらうと考えた。

ある書物に、相談員は「怒らず」「自らを高しとせず」「固定化しない」「しかも、よくものが見え（観える）る」の資質をもたなければならないとあった。当校には専任のカウンセラーはいない。それぞれ教科担当であり学級主任でありクラブ顧問であり管理職である。教師と相談員という

二重構造を負ったものが、生徒に触れる過程で今のままでよいのか？と常に自問していった。かくして、全体会、部会の持ち方にくふうをこらしながら2ヶ年をあゆんだ。これが変容だとは言えないが、全員提出の研究物は必ず締切り時間までにまにありようになった。話し合いが活発になったし、自分の仕事を黙々とやっている。なんでも言いあえる雰囲気が出たこともつけ加えよう。

2 実際に研究をやっている中で目につくもの

当校では学習指導部と生徒指導部から生活の規律が示され、個においても集においても厳守しなければならないものがある。職員研修全体会の場合にもこの規律励行状況が話材となり検討される。集団指導の方法と原理の研究といってもよからう。しかし、これと共に強調しなければならないのは生徒自身が己れの内部を見つめ、自主性や自発性を発揚させ、自ら内に転機をもたらし、外に目的をもった行動の具現が必要であろう。自己指導ということである。受容—理解—指導のサイクルがあつてこそ、己れ自身の拡大が起きるのだと思う。したがって、指導の任に当る教師は、自己があるがままに受け入れられ、一貫した指導態度が確立されていなければならない。そこで考え出されたのが、教育相談の手法と呼ぶのが校の指導場面における機能である。

指導過程や指導段階（場面を鮮明に切りとる）で、程度と意図を含んである対象生徒なりグループなりにはたらきかけをやる。当然、なんらかの反応を示す。そこで、この手法を使っていくわけである。指導法（教科の）ではない。パターンでもない。関係の技法・態度と言えようか。

① よく聞いてやる —積極さをひきだすために—

生徒の反応を同じ血の通った人として耳をかたむけ、そのことに教師自身が全神経を集中しているのだ、尊い反応なのだという聞き方を指す。生徒も「私の存在を感じる」「注意をしてくれる」と受けとれるような聞き方のことである。

② 言いかえをしてやる —共感的な理解へ—

発表力のない生徒・言いとまどっている生徒の回答を、くりかえしてやったり、言おうとしていることがらを推察して、その脈絡からはなれないようにつづめて言いかえしをしてやること。

③ 気持ちを整理してやる —自分を知っていくために—

生徒の表現の中には、語勢、語い、間のとり方、表情などで気持ちがでてくる。教師はすばやく見として、なにげなくとらえて、気持ちを言いかえてやったりすること。

④ 気持ちを明確にしてやる —ことばを見つけてやる—

生徒がうまく表現できないでいたら、的確なことばを与えてやり、気持ちを浮きぼりにしてやる。力を貸すということにもなる。

相談はどこでもおこなえるという発想を大切に、チャンス相談を生かしたはげましと助言のはたらきかけは、廊下でも階段フロア—でも教務室でもできる。教務室の教師機の反対側に椅子を用意し、お互いの目の高さを同じくして腰をおろして話す。ここを才5相談室と名づけた。この相談を随時相談という。屋外作業小屋（生徒の作った花壇のある庭にある）を生徒と教師の手で改造・修理し、塗装して屋外相談室（才6相談室）もつくった。放課後の利用が多い。

グループ相談から個人相談へと念じ、悩みの調査によると、学年の傾向が出てくる。私たちは才2相談室（先生が生徒と語る部屋）へというよりも才1相談室（生徒が先生と語る部屋）へ動く生徒を望んでいる。遊びの時の対話や語りからこの方法を思いついた。クラブ単位、同町内のグループ、遊びなかまが教師に声をかけてくれることを期待しながら、才3相談室（なかまと語る部屋）の使用を自由に解放した。むしろ、彼らが他のグループや友人に話してくれることを期待しながら。

〇〇君どうだい？ 親しみを持ったことばはことば以前のわれわれの表情や体にあらわれている。農繁期の忙しさ、対外試合前の体調、治療の経過、おどり場の花など、どこからでも話はきり出せる。手をにぎって肌のあたたかさを知るといえるが、ことばや態度でそれができないものだろうか？そして静かに生徒についていれば感情が伝わってくる。そこに次の約束と自発相談への契機がかけられている。

HRの持ち方～学年単位に学期ごとに自由にくむ。

- ・5分間朝学習
- ・全校体力づくり
- ・業間体育
- ・歌の週間
- ・ニュース交換
- ・読書
- ・3分間スピーチ
- ・連絡など

随時相談

土曜日を除き毎日10:35～10:50までの15分間を使い、他生徒が業間体育をしている時に、才5相談室で、当日担当の先生と話す機会を持つ。他教師は業間体育をやっている教室へいていない。質問教室の形もある。

学活時間の弾力性

土曜日4限は全校学活を組んでいる。そこで隔週学活時と毎月水曜日（1・3週に）2回を7限特設にし両方で操作しあい、生徒と担当教師（学年・学級担当）との触れあいをはかっている。

清掃分担区域の班構成

従来の学級単位班を解消して、各清掃班に1年から3年生までが入り、リーダーとメンバーの関係を育てる試みをやっている。9月から実施。新しい方式ということで評判はよい。功罪なかばするであろうが、別集団の中の個人、よこ・たての円満な生徒関係の育成という立場から、当分つづけたいと思っている。

作品から相談の話材をとり出す

作文・日記・調査・検査・テストなどからだけでなく、美術科・家庭科・音楽科・技術科などの生徒創作品からも対象生徒の側面をとらえ、相談への手がかりを求める。

地域へのはたらきかけ

当部落では公民館主催の成人教育講座が毎月、それぞれおこなわれている。その際、講座の内容に教育相談に係る生徒の問題（家庭のありかた）一般論をおりこんでもらっている。学校側講師は主として学校長である。

おわりに

われわれは生徒をはなれて進歩的変容など語れない。

本校生徒の現在と未来のために、相携えてこの教育の道を歩むという厳粛な事実をたいせつにしながら、研究をとおし、和と切磋を尊重してここまで来た。2か年の研究経過の中で問題生徒が出なかったという事実がある。研究態勢の確立といろいろな方法を、われわれなりの力で実践研究をつづけてきた。たしかに言えることは、職員のあゆみよりが、生徒の問題いろいろな接点でとらえ、分析し、手だてをほどこしていくこととなった。中学校は、ひとりの教師だけの責任学級担任の深い愛情などという表現のしかたにかくれた経営および指導では、モラルの高揚にならない。教師間の人間関係の進歩的変容（操作的変容ではない）こそ、生徒個々の幸せにつながるものだとすることを痛感した。

最近、悩みの内容が多岐にわたってあらわれてきたこと、友人の存在とそのかわりあい方に強い関心を抱きはじめたこと、これらのことは、生徒が自己自身をつぶさにみつめようとする方向に変容しつつあることを意味しているように思われる。また、相談相手に教師をえらぶ生徒がふえきたことなどを考え合わせると、教師として自己研修を重視し、さらに継続していきたいと思う。

この研究をとおし、いくらかの自信が生まれてきたことを感じる。しかし、まだまだ毎日の実践が試行錯誤の連続である。教育実践の対象である子どもたちは、私たちとのかかわり合いの中で成長していくのである。かかわり合いの中に関係は成立し、その瞬間瞬間の中にも、彼らの望と意志が最大限に尊重されなければならない。そのような関係の中において生への躍動が芽えるのではなかろうか。そして、意志の決定と行動化が彼らの希望につながり、自信となって自己拡大、自己実現へと向うであろう。

教えていただいた中に「共に生きることを味わう」ということばがある。もって座右銘としべんを置く。